

丸岡藩騒動記 作造の仇討 第三部

剣技（２） （P32～37）

場所は中庭。儀左衛門の竹刀は三尺九寸、太刀なら大太刀の長寸である。作造は二尺足らず、太刀なら小太刀である。儀左衛門は作造にも大太刀を用いることを求めたが、

「重次公の剣技は小太刀にこそ真髓があります」と言う。見届け役は太田又八が務めた。刑部と九八郎は床几しょうぎに座り、郎党より武芸の心得がある五名が許され、正座し固唾を吞んで立会を見守っている。

両者の間隔は二間にけん、お互いが一礼すると、
又八、「始め！」と声をかけた。

両者、中段の構えを取った。間合いを詰めたのは作造、ジリジリと迫り、一間ほどの距離になった。儀左衛門が踏み込めば打ち込める間合いである。だが、彼は仕掛けなかった。作造の構えに隙が見いだせなかったからである。打ち込めば、その刹那せつな、竈手こてを取られる。時が経つが両者動かず。と、作造が右斜め下段の構えに移った。顔、肩が無防備になった、作造の誘いである。儀左衛門、もとより承知で誘いには乗らないが、上段に構えた。

作造がさらに半歩踏み出した。これ以上間合いを詰められると相手の間合いになる。儀左衛門、右肩を狙って竹刀を振りおろす。作造、軀を開きかわす。儀左衛門、竹刀を跳ね上げ胴を狙う。作造半歩さがりかわす。さらに儀左衛門、三の太刀、四の太刀、五の太刀を繰り出して追う。

作造、右に左に、後へとかわしながら時に小太刀で受けとめながら太刀筋を見ている。追い切れなかった儀左衛門、足を止め上段に構え直した。作造は中段の構えに戻す。少し時間があいた。

と、儀左衛門が大きく踏み込み、作造の頭上に竹刀を振りおろした。その竹刀を作造の竹刀が凄まじい力で跳ねると、衝撃が儀左衛門の体勢を崩した。その瞬間、作造、軀を相手に密着させ、二尺の竹刀を儀左衛門の首筋に当てた。

真剣なら頸動脈が切断されている。

「それまで！」又八の声が響いた。

「見事だ、作造」と褒めた。

「作造殿、もう一度立ち会ってください」儀左衛門が言う。

「儀左衛門、技量の差は明らか。二度、三度立ち会おうが結果は同じだ」又八が叱る。

「御家老、今の立ち会いは重次公の技を用いておりませぬ。重次公の技と比べるものに過ぎませぬ。再度の立ち会いをお許しください」作造が言った。

「作造殿、ぜひともお願いいたします。御家老！」儀左衛門が懇願した。

又八、作造を見た。百姓作造ではなく武芸者、長谷部作造がそこにいた。

「皆の者、重次公の技、しっかり目に焼き付けよ。儀左衛門、心して臨め！」

両者、二間の間合いで再び向き合う。儀左衛門は上段の構え、作造も上段の構えである。双方、徐々に間隔を詰めてゆく。再び一間の距離に縮まった。儀左衛門の間合いである。今だ！と思った瞬間、作造が飛び込み、儀左衛門の左肩に竹刀を振りおろした。虚を突かれた儀左衛門だったが、すかさず作造を打った。相打ちのように見えた。

「勝負あった！」又八の大声が響く。

双方、竹刀を収め、一礼をした。

「参りました」と、儀左衛門が言った。刑部と九八郎^{けげん}が怪訝な表情を浮かべた。

相打ちである、引き分けであったと思っているのである。

「相打ちであろう」と、刑部が言った。

「儀左衛門、その方から説明せよ」と、又八が命じた。

「作造殿の太刀は拙者の命を奪っておりました。しかし拙者の太刀は作造殿にかすり傷すら与えていないのです」

「しかし、お主はたしかに作造を打っている」刑部、重ねて訊く。

「作造殿の太刀は鋭く、拙者の急所を打っております。打ち込み応じて打ち返

しましたが、一瞬遅れ、弱く、しかも急所を外しておりました。戦場^{いくさば}であれば

拙者の太刀は鎧の上であり、切り傷さえ与えておりません。一方、作造殿の太刀は確実に拙者の命を奪っております」

「なるほど、これが重次公の伝えた奥義であったか。儀左衛門、奥義見極めたか」又八が感に堪えぬように言うと、
「はい」と、儀左衛門、大きく頷いた。

九八郎はまだ合点がゆかぬ表情である。
「わかりませぬ。最初の試合での作造殿の技は見事なものでございました。二度目の試合は浅いとはいえ作造殿も打たれております。何故二度目の試合が奥義でございましょうか」九八郎が訊ねる。

「平場の戦いなら相手の太刀をかわす技も必要でしょうが、戦場に受けの技は無用でございます。一撃で相手を倒す技のみでございます」と、作造が答えた。

「受けの技がなければ、手傷を負うことになります、命を落すやも知れませぬ」九八郎は容易に納得しない。

「九八郎、戦場は技を競うためにあるのではない。命を奪うためにある。我が命を惜しんでは戦^{いくさ}にならぬ」と、又八が叱責した。

「九八郎さま、重次公の奥義は『必殺の技あるのみ。覚悟あるのみ』にございます」作造も言う。

九八郎、ようやく納得したようだが、さらに訊いた。
「作造殿、なにゆえ二尺の竹刀を用いられたのですか、長尺物に比べて不利と思われませんが」

「戦場では甲冑をまとして戦います。さらに重い大太刀を用いることは必ずしも利があるとは申せません。戦で求められるのは俊敏な動きです。さらにお互い甲冑となれば打ち込む場所も限られます。扱いやすい小太刀にも利があるといえるのです。

太刀の長短の不利は打ち込みの鋭さで補えます。むしろ接近すれば小太刀が有利となります。此の度の立ち会い、間合いを詰めることが手前の策でございました。そのために二尺の竹刀を用いたのです」と、作造が明かす。

「重次公は戦場での技、必死の覚悟を伝授されたのか。分かり申した」と儀左衛門は納得の表情をみせた。

一同、座敷に戻った。

「重次公の勇猛は三河武士の中でもひとときわ抜きん出ていた」と、刑部が言う。
「まことに左様でござる」と、又八が相槌を打った。

郎党が茶菓を供した。作造、謹んで飲む。

茶は贅沢品であり、百姓が飲むことは禁じられていた（注）。もちろん禁止されるまでもなく、貧しい百姓が茶を嗜むことが出来るはずもない。野草を煎じて飲むこともあったが、それらは薬草であり、不味く、我慢して飲まねばならぬ代物だった。ただ乾燥させた柿葉の茶は嗜好品として百姓の間でも楽しまれていた。作造もよく飲んでいて、だが、本物の茶とは比べようもない。

出された茶は遅摘みの茶、いわゆる番茶である。千石の家老職である又八は早摘みの茶、煎茶を客人に供することもできるのだが、安価な番茶を用いていた。父の代までは 70 人扶持（126 石相当）の身分で、質素な暮らしに慣れてきた又八にとって立身出世した今でも、贅沢をしようとは思わない。茶も番茶がせいぜいで普段は白湯である。又八と対立している本多織部らは、

「育ちは争えぬものよ。軀に^{けち}吝嗇が滲みついているわ」と嘲笑している。そんな風評を彼は気にしない。

「儂は吝嗇さ」と言っ^{はばかい}て憚らない。目的があった。そのことは後で述べよう。
菓子は干柿であった。屋敷内に柿の木が 3 本ある。裏口にも 2 本ある。甘柿は裏口の 2 本、3 本が渋柿で干柿とする。それが供されたのであった。

茶を飲んだ後、又八が口を開いた。

「重次公が武名を轟かせたのは老年に至ってからであった。信玄公上洛途上の^{みかたがはら}三方ヶ原で家康公は武田方と戦ったのだが（注）、打ち破られ、数多の武将が討ち死、家康公も命からがら浜松城に逃げ帰るという散々な負け戦となった。重次公も馬を射られて落馬し、武田勢十数騎に囲まれ馬上より槍で突きたてられ

落命寸前であった。しかし重次公、その一騎の槍を手繰り寄せて引き落とし、首を掻き切って馬を奪い、囲みを破って帰城された。御年44歳のときであった。

ながしの
長篠の戦（注）では敵味方大勢の中に割って入り、能き相手を見つけて組打となり首を取った。だが八人の敵に囲まれ一人奮戦するも重き傷を負い、最期と見えたが郎党一人が駆け付け、二人を斬って捨て、その凄まじさに敵は退いた。46歳であった。

信康殿が自刃の後（注）、家康公の命により岡崎城の守将となったとき、武田方の高天神城^{たかてんじんじょう}を攻め、十八名の敵将兵を打ち取った。五十二歳であった。

武田氏が滅び（注）、信長公が謀叛に遭い（注）、甲斐、信濃は再び戦乱の地となった。東国支配をめぐり家康公と北条氏（氏直）が争い、重次公は沼津城に籠り北条氏の出城、韮山城と対峙した時のことである。韮山城より攻めてきた敵を戸倉山（静岡）にて迎え撃ち、韮山城に追い返し、敵兵三十余を討ち取った。

こまき　ながくて
小牧・長久手の合戦では（注）、御年五十六歳ながら滝川一益公^{いちます}ら羽柴勢が籠る蟹江城攻撃の先陣を賜り、羽柴勢を敗走させた。

重次公は数多の戦場で手柄を立てられたが、御自身も右目を失われ、片足に傷を負われて歩くこともままならず、指も数本切断されて刀を握ることさえ苦勞された。まさに満身創痍^{おからだ}の御軀であったが聊^{いささ}かも闘志に陰りが生じることなく、老年に至っても刀槍^{とうそう}を振われた。故に敵はもとより、味方からも鬼作左衛門と恐れられたのである」

儀左衛門、九八郎が散々聞かされてきた重次武勇伝である。さらに今日、重次の奥義を目の当たりにして、いっそう熱が入ったのであった。

「作造、儂の下で働かぬか」突然、又八が切り出した。急な話に作造は返答できない。

「夢があるのだ。我が藩に新しい産業を興して、藩の財政を潤し、領民の暮らしを良くしたいとの夢があるのだ。

『^{まつりごと}政^{おさ}の根本は世^{すく}を経め、民を済うことにあり』(注)と、彼の国の賢人は語った。儼はそれを目指したい。作造、助力せぬか」
又八は思いを熱く語り始めた。

注 三方ヶ原の戦い・・・元亀3年(1573年)、武田信玄との合戦。
長篠の戦い・・・天正3年(1575年)武田勝頼と織田徳川連合軍との戦い。
信康殿、自刃・・・天正7年(1579年)信康、父、家康より自刃を命じられる。後、重次が信康居城、岡崎城を守る。
高天神の戦い・・・天正9年(1581年)。
武田氏が滅び・・・天正10年(1582年)武田勝頼自刃。
信長公謀叛に遭い・・・本能寺の変。
小牧、長久手の合戦・・・天正12年(1584年)、秀吉と家康との合戦。

参考資料 新井白石著「新編^{はんかんふ}藩翰譜・・・本多重次についての記述」

茶は贅沢品であり、百姓が茶を飲むことは禁じられていた。

・・・慶安2年(1649年)に発令された「^{けいあんおふれがき}慶安御触書」(農民の生活を統制するための御触書)により、百姓が酒、煙草、茶を飲むこと、白米を多食すること、木綿と麻以外の衣服は禁じられていた。

世を経め、民を済う・・・隋の時代(581～618)の儒学者、^{おうとう}王通が提唱した

『^{けいせいさいみん}經世済民』思想。日本では江戸時代に儒学者、蘭学者によって紹介された。